



ロート製薬株式会社
代表取締役会長

やまだくにお
山田邦雄氏

「人がやらないことをやる」 社会貢献活動にも生きる創業精神

創業123年、大阪の老舗製薬会社・ロート製薬は、「Vロート」で知られる目薬以外にも、スキンケア商品やサプリメント、食、再生医療など、さまざまな事業を展開している。そこには創業以来の「人がやらないことをやる」精神が流れており、同社が行う数々の社会貢献にも受け継がれている。そうした活動への思いについて、当協会理事長の崎元利樹が伺った。

日々の健康と美容

崎元 御社は目薬でよく知られていますが、それ以外にもさまざまな事業を展開しておられます。最近は御社の化粧品のお名前をよく耳にします。まずは、そうした事業にかける思いについてお聞かせください。

山田 創業者は私の曾祖父(山田安民氏:1868-1943)で、1899年に胃腸薬からスタートして10年後に点眼薬「ロート目薬」を発売しました。昔は目薬瓶と点眼器が別々でしたが、事業を引き継いだ祖父(山田輝郎氏:1894-1982)が一体型の「滴下式両口点眼瓶」を日本で初めて開発して大きな注目を集めました。上部のゴムキャップを押すと下の穴から目薬が一滴出るといふものです。そうしたこともあって昔から目薬の会社というイメージが強いかと思います。

近年、当社ではスキンケア商品、妊娠検査薬、さらには食分野や再生医療分野など、日々の健康と美容に貢献すること

を基本方針として挑戦を続けています。

日の当たりにくい研究を支援

崎元 チャレンジングな事業活動の一方で、公益財団法人山田科学振興財団をはじめとする教育・学術振興支援や、サッカーやバスケットボールチームへの支援など、文化・スポーツ面でのさまざまな社会貢献活動にも積極的に取り組まれていますね。

山田 創業者は文化的活動に関心が強く貢献もしました。祖父も事業で成功したのでそれを社会に還元したいという思いから「公益財団法人 山田科学振興財団」を設立しました。また、かつてのような「競泳大国・日本」の再興を願い、私財を投じて「山田スイミングクラブ(1965-1972)」を設立し、優れた水泳選手を育成してオリンピックメダリストも多く輩出しました。当社はこうした思いを受け継ぎ、現在、ガンバ大阪(サッカー)やバンビシャス奈良(バスケットボール)といったスポーツチームの活動を支援しています。

崎元 山田科学振興財団は、自然科学の中でもとりわけ基礎研究分野への支援に力を入れておられると伺いました。

山田 それユニークなところですよ。当財団は学術研究の成果を期待して助成するのではなく、どちらかといえば日の当たりにくい基礎研究分野を支援し、今年で45周年を迎えます。また、父が社長をしていた1995年、当社は日本の眼科研究の発展に寄与することを目的として、優れた研究を行っている若手の眼科研究者をたたえる「ロートアワード」を創設しました。これも研究活動を純粋に支援するもので、今や日本の眼科分野では権威のある賞といわれています。

製薬企業が農業を支援する意義

崎元 御社では農業分野での社会貢献にも取り組まれていると伺いましたが、それはどのようなご活動でしょうか。

山田 2013年にアグリ・ファーム事業部を立ち上げ、農・畜産物の生産や加工業と併せ、起業や担い手のサポートによる地域振興にも寄与する事業として取り組んでいます。「健康とは何か」を突き詰めて考えれば、病気になること、つまり「薬に頼らず、薬が必要でなくなること」です。そこで「薬に頼らない製薬会社になりたい」との思いで、健康づくりの原点である「食」に着目し、この分野にチャレンジしました。例えば沖縄県石垣島にある当社のグループ企業「有限会社やえやまファーム」では、化学肥料や化学農薬を使わない有機栽培のパイナップルを育て、それをジュースにした後の搾りかすを使った飼料で豚を育て、その糞尿から堆肥を作って、またパイナップルを育てるという循環型農業に取り組んでいます。不可能といわれていたパイナップルの有機栽培を実現し、その餌で育った豚は“南国の豚”を意味する「南ぬ豚(ばいぬぶた)」というブランドで出荷されています。



南ぬ豚と有機栽培で作られたパイナップルのジュース(やえやまファーム)



崎元 沖縄県以外にも各地で地域連携の取り組みをされていますね。

山田 当社の創業地である奈良県宇陀市では、子会社の「株式会社はじまり屋」がJAS有

機認定を受けて野菜を育て、その収穫・販売までを行っています。当社は、2015年には奈良県と地域の活性化に取り組む包括協定を結びました。こうした事業を通して農業人材の育成や



奈良県宇陀市での農業(はじまり屋)

地域産業の活性化に貢献したいと思っています。また、宇陀市は日本の薬草の発祥地でもあり、当地でも一度薬草の栽培や研究に関する産業振興を図ろうとしています。これらはまだ実験的な試みではありますが、食料自給が厳しくなっていくであろう将来のことも考え、当社なりの貢献を目指しています。当社のお客様は日本全国津々浦々におられますし、そのための営業ネットワークもあります。そこで、単に商品を提供するだけではなく、ご縁のあったところで地元と連携した数々の取り組みを行っています。

コロナ禍での需要

崎元 飲食業やホテル業などでは、コロナ禍による甚大な影響を受けています。御社の事業や社会貢献活動には、どのような影響がおりでしょうか。

山田 長引くマスク生活でリップクリームをあまり使わなくなったとか、新型コロナの感染拡大に伴って百貨店などが営業時間を短縮し、化粧品事業に影響が出るといったマイナス面もあるのですが、スキンケアのニーズはむしろ高まっているように思います。とくに「肌ラボ」シリーズのようなスキンケア商品の売り上げがすごく伸びています。ですからプラスマイナスすれば業績に大きな影響はないといえるでしょう。コロナで打撃を受けている業界に比べると、むしろ恵まれているほうだと思います。

崎元 新しい製品を次々開発されていますね。スキンケアはもちろんですが、目のサプリメントというのも人気です。

山田 若い人からお年寄りまで、日々の生活でパソコンやスマートフォンなどを見つめる時間が増えており、アイケアの需要はコロナ禍でも非常に根強いといえます。そこで当社は、点眼薬だけではなく、サプリメントも使って目の疲れを取ることに力を入れています。おかげさまで順調に売り上げを伸ばしています。

再生医療分野に挑戦

山田 当社は製薬企業として、2013年から再生医療事業にも力を入れています。例えば、間葉系幹細胞*を使って肝硬変の進行を少しでも抑え、機能回復にいたるようなもので、2017年から新潟大学との治験(臨床試験)を開始しました。また、当社が主導して医療系ベンチャー企業や大学などと協業し、再生医療に関連する製品開発や製造など、さらに研究を進めているところです。

崎元 大阪・関西は、そうした医療分野での先進性が高いですね。



聞き手 **崎元利樹**

公益財団法人 関西・大阪21世紀協会 理事長

山田 大阪大学を中心に先端医療の研究機関が集積していますし、近い将来、大阪・中之島に「未来医療国際拠点*」ができます。当社はその立ち上げに関与しており、新たな医療拠点での研究に参画する予定です。



新潟大学との治験を開始(2017年)



国内で初めて開発に成功した自動培養装置

- *間葉系幹細胞…骨髄や皮下脂肪の中にある幹細胞。細胞分裂による増殖能が非常に高く、神経や筋肉、脂肪、骨などに分化する「多分化能」を持っている。iPS細胞に比べて、使用に際して安全面の問題も少ないとされる。
- *未来医療国際拠点…再生医療をベースにゲノム医療や人工知能(AI)、IoTなどを活用し、今後の医療技術の進歩に即応した最先端の未来医療の産業化を推進する国際的拠点。一般財団法人未来医療推進機構が運営。

我が道を行く気概

崎元 大阪は、大正時代には大大阪といわれたほど、日本で最も活気のあるまちでした。しかし、やがてその地位は東京にとって代われ、往時に比べて大阪は元気がないといわれるようにもなりました。こうした現状については、どのように見ておられますか。

山田 私は、オープンなイノベーションの気風がある大阪の企業文化が好きでした。良くも悪くもお上^{かみ}に頼らないというか、物事を本音ベースで考えるというか、何事も民間の活力で切り開いていこうとする気概です。それと、あまり群れずにコツコツと我が道を行くのも関西系企業の特徴だと思います。お上の号令に従って業界で足並みを揃えるのではなく、「オタクはオタク、ウチはウチ」と。だからこそイノベーションも生まれやすかった。しかし、そんな気概のある企業がどんどん減ってきているのかもしれない。ある意味、京都の企業のほうが肝が据わっているというか、異端で居続ける存在感がありますね。

大阪の課題は日本の課題

崎元 大阪の企業文化を再認識するということでしょうか。具体的に大阪を活性化させるために、今、どんなことが必要だと

思われますか。

山田 人を育てる長期戦略です。もっと戦略的に予算をつけるなどして、人材と科学技術をきちんと育てるということをするべきだと思います。当社は多くの大学と共同研究していますが、立派な先生方はたくさんいらっしゃいます。どうしても個人の努力だけでは限界があるものです。中国では日本の10倍の予算がついて実験設備なども充実していますよね。これは大阪に限らず日本の課題です。研究者の育成や科学技術の振興に社会のリソースを十分に割けていないことも要因の一つだと感じます。海外なら優秀な人を加速度的に育てて、国家がベンチャーを後押ししています。日本にもそうした国家プログラムはありますが、社会の認識が極めて低いのはもったいないですね。

崎元 人に対する投資ができていないのですよね。

山田 日本全体がそうですし、大阪もそうです。適塾のレガシーを取り戻したいところですね。科学分野での人材を育てることを何より大切にしたいと考えています。また、人材育成は短期に果たせるものではありません。30年後、50年後に託す種まきを今から始めないと。そうした分野にしっかり投資をして、明るい未来を描こうではありませんか。

未来をつくる種まき

崎元 例えばどのような種まきが必要だと思いますか。

山田 時代はすでに、石油に依存する技術からバイオ技術を活用する方向に移っています。当社でも、神戸大学と協働してバイオ技術を用いた新たな産業基盤をつくるプロジェクトを始めました。バイオ技術やデータサイエンス、そして先ほどお話ししました再生医療は未来をつくる上で不可欠な種まきです。

崎元 細胞の力を引き出す再生医療は、2025年大阪・関西万博のテーマとつながります。

山田 大阪・関西万博が、そういう種まきを誘発する機会になればと思います。万博によって誰に影響を与えなくてはならないかという、明らかに若い人たちです。中学生ぐらいの子どもたちに自分たちの未来を想像させ、大いなる期待を抱かせるのです。未来の人を育てるという意味で、バイオテクノロジーやライフサイエンス、データサイエンスの可能性に目覚めさせるのが今回の万博が果たすべき役割だと思います。その影響を受けた若者が将来ベンチャーを起こすことにつながれば、それこそが万博のレガシーといえるでしょう。

崎元 未来に向けた種まきに期待したいと思います。本日はありがとうございました。

山田邦雄氏

1956年大阪府出身。1979年東京大学理学部物理学科卒業、1990年慶應ビジネススクールMBA取得。1980年ロート製薬入社。営業、マーケティング部門などを経て、1992年代表取締役専務、1999年代表取締役社長。2009年より現職。

ロート製薬株式会社

本社:大阪市生野区巽西1-8-1。1899年創業、設立1949年。医薬品・化粧品・機能性食品等の製造販売。資本金65億400万円、売上高1,012億700万円(単体)、1,996億4,600万円(連結)、従業員数1,599名(単体)、6,866名(連結)(2022年3月期現在)

(写真提供:ロート製薬株式会社)